

# 私塾界

Monthly  
Shijyukukai  
No.366

www.shijyukukai.jp

10

OCTOBER  
2011

## 東日本大震災を 未来の糧に



直木賞作家 志茂田景樹

## カゲキに行こう!

### 142 震災以前と以後の若者意識

昇格をはたして創立された母校に戻ったのである。あれから六〇年か、と歳月は経ってみるとつかの間のことだに改めてびっくりする。

六〇年前、八〇代半ばの人は慶応年間の生まれで、母がこんな言い方をした。「あそこのおじいちゃんも慶応三年の生まれなんだって、長生きねえ」

卒業時の校長は明治20年代の生まれだった。大半のお父さんお母さんは明治生まれだった。

長寿の今は八〇代の方はごく普通にいるが、その少なからぬ部分が昭和生まれである。

でも、僕らはいい時代を生きたと思う。

焼け野原の東京を見ているし、そこに響きわたって出した福音も盛んに聞いて育った。

ひどい思いもしたけれど、何もなかったから、これから作ればいいんだ、と将来に大きな希望を持つこ

ともできた。

何でも手に入る環境で育った今の若い世代は妙に冷めたところがある。先が見通せないですから何をやるかという気にならないんですね、と時代のせいにして、不透明だから何かを築いてはつきりさせればいいのに、とどこかでもどかしい気持ちになる。

明治維新も旧体制が崩壊して何もかもがゼロからのスタートになった。多くの若者がそこに新しいものを築くために新しい技術と知識を吸収しようと欧米各国へ留学した。

そういう若者たちを主人公にした拙著『蒼翼の獅子たち』が原作の映画『学校をつくらう』が今春、東京を皮切りに順次全国で公開され、今夏、盛岡、仙台、福島で公開された。なかなかの入りだそうである。

震災で大きな被害に遭った東北の方々がこの映画を見て少しでも背中を押された思いになってくれたら

たらとてもうれしい。

それ以上にうれしく感銘を受けたのは、被災地を訪問させ慰問をして回っていると、どこでもボランティアの若い人たちが生き生きと行動していたことである。

あつ、震災前の若者たちと意識が違う、と瞳目する心地だった。自分たちが築くんだ、復興するんだ、という思いが伝わってきた。その思いの裏にあるものは希望である。

震災前の若者と同じかもしれないが、明らかに新しい意識を抱いている。いぞ、と僕は内心で快哉した。

■志茂田 景樹 (しもだかげき) ■  
1940年静岡県伊豆生まれ。中央大学法学部卒業後、様々な職に就く。1976年『やっこ探偵』で第27回小説現代新人賞受賞。1980年『美しい牙』で第83回直木賞受賞。「サカキバツ症候群の子どもたち」「心療内科」等の心を問う著作のほか、「おれたち不登校。個性と心で生きてやる」、「親と子の価値観戦争」等、現代の教育を問う著作も多い。

、というもの。親子で参加し、子どもたちが夏休みに広く社会を知る体験の機会とするとともに、府県庁等の施設への理解を深めてもらうことを目的として、平成12年度より実施している。